

# ロマンとスラ鹿のヤル

長田進治・作  
伊與田喜代美・絵

ロマンとスラ鹿のヤル

長田進治・作  
伊與田喜代美・絵

(C) Office Shinji Osada



# ロアと へら麋のオム

長田 進治・作 伊與田 喜代美・絵







知<sup>し</sup>って<sup>る</sup>か<sup>い</sup>？

その昔<sup>むかし</sup>、

ひろーい田んぼのひろがる

海老名<sup>えびな</sup>耕地<sup>けいち</sup>には、恩馬<sup>おんま</sup>郷<sup>ごう</sup>という

実<sup>ゆた</sup>り豊<sup>とよ</sup>かな里<sup>さと</sup>があ<sup>っ</sup>たんじや。

そのひろーい、ひろーい

田んぼに水<sup>みづ</sup>が引<sup>ひ</sup>かれると、

村<sup>むら</sup>々は海<sup>うみ</sup>に浮<sup>う</sup>かんだ島<sup>しま</sup>のよう<sup>に</sup>美<sup>う</sup>しく、

人<sup>ひと</sup>々は幸<sup>さい</sup>せに暮<sup>く</sup>らしてお<sup>っ</sup>たんじや。

し<sup>か</sup>しな<sup>あ</sup>、

あ<sup>る</sup>年<sup>とし</sup>のこ<sup>と</sup>、

こ<sup>の</sup>里<sup>さと</sup>に疫<sup>えき</sup>病<sup>びょう</sup>がは<sup>や</sup>り、


体<sup>てい</sup>の弱<sup>じやく</sup>い年<sup>とし</sup>寄<sup>よ</sup>りや

子<sup>こ</sup>供<sup>ども</sup>た<sup>ち</sup>が熱<sup>ねつ</sup>を出<sup>し</sup>て

苦<sup>くる</sup>し<sup>ん</sup>で<sup>い</sup>た<sup>そ</sup>う<sup>な</sup>…

(C) Office Shinji Osada





田んぼに稲穂がみのり、  
黄金色に輝くころ、  
恩馬郷にロアンという名の青年があらわれたんじや。  
ロアンは、アルという名の大きなへら鹿をつれていた。

「豊かな村だ」

ロアンは、たわわに実った稲穂を見て目をほそめた。  
しかしアルは、吹いてくる風に鼻をヒクヒクさせ  
「ブルル」と口をふるわせた。

何か良くないことを感じたとき、  
アルはいつもそうするのじや。

「アル、やはりそうか、

この村では年寄りと子供の姿を見かけない」  
アルの鼻をなでると

ロアンは、背中に積まれている薬草に目をやった。

「疫病がはやっている村とは、この村のこのようだ」  
アルは「ヒヒン」と声をあげたんじや。

それから、ロアンは村のはずれに小さな庵をたて、  
薬をつくり、苦しむ人々に飲ませた。

するとひとり、またひとりと元気になり、  
やがて村には疫病に苦しむ者はいなくなった。  
そりやあもう村人はよろこび、

ロアンのことを

「ロアン先生」と呼ぶようになったのじや。



ある日、背中に大きなコブのできた、  
三太という男の子と母親が、ロアンの庵をたずねてきた。  
母親は言った。

「たぶんこの子は野菜をちっとも食べないから、  
こんなコブができてしまったんだ…」

先生、なんとか助けてやってください」

三太の背中には、こぶしのように大きく、  
りんごのように赤いコブがあった。

ロアンは頭をなでると

「痛いかい？」と聞いた。

三太は「うん」とうなずいた。

「野菜はなにがきらいだ？」

「にんじん、だいこん、

それにたまねぎ…」

ロアンはにっこりと笑って

「今日からにんじんとだいこんと、

たまねぎを食べるなら、

このコブを消してやろう」

と言ったのじゃ。

三太がコクリとうなずくを見ると、  
ロアンは背中のコブに手をあて、目を閉じた。  
すると不思議な事がおきた。  
コブがスーッと消えて、なくなったのじゃ。

次の日、このうわさを聞いて、

咳の止まらぬ老婆がロアンのところへやって来た。

じつはな、その老婆というのは、わしのことじゃ…

「わしはコンコン… 咳がコンコン…」

もう三年も止まらんのじゃ、コンコン…」

苦しくて、苦しくてそう言うと、

ロアンはアルの角を少しだけけずり、飲ませてくれた。

なんと咳はぴたりと止まり、

息がスーッとできるようになったのじゃ。

「こんなにスヤスヤと息ができるのは久しぶりじゃあ。

本当にありがとう」わしはロアンに感謝した。

それからロアンのもとには、病氣やけがをした人々が

毎日のようにやって来るようになった。

しかしじゃ……



(C) Office Shinji Osada



ある夜…

三太がロアンの庵へやって来て中をのぞくと…

「うううう…コンコンコン、ゴホ…」

うつぶせになって苦しんでいるロアンの姿が見えたのじゃ。

よく見ると、その背中に大きなコブがあるではないか。

「あ！ あれは、おいらの背中にあったコブだ」

三太はその場にしゃがみ、声が出そうになるのをがまんした。

そしてもう一度中をのぞくと、

そのコブを。へろ。へろとなめる舌が見えた。

へら鹿のアルじゃ。

するとロアンは「フーツ」と息をはき、

コブが小さくなっていくのが見えたのじゃ。

三太は知った。

「ロアン先生はみんなのけがや病を、自分の体にうつして…

そんでもって、なおしているんだ」

それだけではない。

薬となるアルの角も少しづつけずられ、

村に来たときには、大きな翼を広げたようだった角は、

とがった枯れ枝のようになっていたのじゃ。

(C) Office Shinji Osada





二度目の冬が過ぎ、春になり、  
海老名耕地の田んぼに、水がいっぱいになるころ、

その日もロアンは村人の病をなおしていた。

すると突然アルが、ブルルツと口を鳴らしたのじゃ。

そう、悪いことが起きる知らせじゃ。

ロアンは目をつむり、耳をすませた。

遠くから走ってくる人の足音が聞こえ、

たちまち一人の村人がロアンの庵に飛び込んで来た。

「先生、大変じゃあ！」

社家村の三島社に大蛇が現れた」

ロアンは立ち上がった。

「大蛇だと！」

「赤い目だ！」

大人の腕でもかかえきれなくらいだ！」

「相模川のほとりにある神社だな」

「そうだ！」

しかもたった今、

女の子が一人

のみこまれたと言うではないか。

ロアンはすぐに刀を腰にさし、

弓矢を背負ってアルの背中に飛び乗ると、

三島社をめざして走り出した。

ロアンを乗せて走るアルは風のようにじゃった。

永池川をひと足で飛びこえ、

水のはられた海老名耕地を

ものともせずにかげ抜けたのじゃ。





三島社では：

子供をのみこんだ大蛇が  
お社の屋根にからみつき  
満足そうに眠っておった。

ロアンとアルが近づき、様子をうかがうと、  
大蛇は赤い大きな目を開け、  
ギロリとロアンをにらんだ。

ロアンは胸の前に手を合わせ、静かに言った。  
「その大きな体、さぞかし名のある生き神様かと存じます。  
なにゆえこの社で、罪なき子供を襲いなさる」

しかし大蛇は動こうともしなかった。  
ロアンは続けて言った。

「答えによっては容赦いたしません  
すぐにのみこんだ子供を吐きだし、この場を去って下され！」  
「なに？」

首をもたげた大蛇は、  
二つに割れた長い舌をペロリと出すと、  
口をあけてロアンにせまってきた。

その大蛇の口といたら  
大人でさえひとのみにしてしまうほど  
大きな口じゃった。





「あぶねえ！」見ていた村人が声をあげた。

しかし、ロアンを乗せたアルは、後ろ足でポンと地面をけっただけで、せまり来る大蛇から飛びのいた。すると大蛇は、天から響くような声を出した。

「遠い昔、お前によく似た人間を見たことがある」

大蛇は続けて言った。

「お前こそ何者じゃ、わしは二百年も生きておるが、生き神などではない。」

長く生きておれば、体も大きくなるわい。

ネズミを食らうて満足できるとでも思うか！」

大蛇はお社をスルスルと降りてくると、

ロアンとアルを取り巻いた。

ロアンを乗せたアルは、

トン、と地面をけり鳥居の上に飛び乗った。

そしてロアンは

大蛇めがけて矢を放った。

ビュン！ ビュン！

矢はうなりをあげて

大蛇にむかって飛んだ。



しかし、

大蛇の体はかたいウロコに覆われていて矢をはね返してしまうのじゃ。

ゴーツ！

大蛇は音をたてて地面をはい、ものすごい勢いで鳥居に登っていった。

ロアンはアルに飛び乗り、

大蛇の牙をよけながら

今度はお社の屋根に跳ねあがった。

そこからまた弓を引こうとした

ロアンだったが、

後ろからのびてきた大蛇の

長いしっぽに巻かれ、

地面に叩きつけられてしまった。

大蛇は大きなとぐろを巻くと、

ニヤリと笑った。

そして目を光らせロアンをのみこもうと、ペロリと舌をなめた。

(C) Once Upon a Time



そのときじゃ、

ロアンは大蛇の体のまん中あたりに  
ポコリとふくらんだ場所があるのを  
見のがさなかった。

ロアンは立ちあがると大蛇に飛び付き、  
その腹に刀を突き立て  
思いつき横に引いたのじゃ。

すると、バリバリバリ！

大蛇のウロコが割れ、

さけた腹から子供がポコリと地面に落ちたのじゃ。

「ぬうううう！なにをしゃがる」

怒り狂った大蛇は、空をつきやぶるほどに高くのび上がると、  
牙をギラギラと光らせてロアンに襲いかかった。

ロアンは静かに子供の前に立ちふさがると、  
両手を大きく広げ、大蛇にむかって叫んだ。

「わが身に受け入れた病の数々、丸ごと飲みこんでみよ！  
必ずや、おまえの体に祟って出ようぞ！」  
そして目をつむり、覚悟を決めた。

しかし次の瞬間、

ザクツという音を聞いたロアンが目を開けると、  
大蛇がかみついたのは、

ロアンの前に立ちふさがったアルの頭だったのじゃ！  
「アル！ばかな、何をする」

(C) Office Shinji Osada



だが苦しみの叫び声をあげたのは、アルではなく大蛇の方だった。

「んごおおお…」

なんとアルのどがった角が、大蛇の上あごをつらぬいていたのじゃ。

大蛇はたまらず身をよじった。

その勢いでアルは飛ばされ、灯笼に体を打ち付けてしまった。

アルの角は根元から折れ、大蛇の上あごに刺さったままだ。

ロアンは急いで子供を抱き上げ、その口から息を吹きこむと、子供は目をさました。

「アル、大丈夫か！」

たおれたままのアルは小さくうなずいた。

一方、角が刺さった大蛇はたまらない。

痛みに苦しみながらツキという大きな木にからみつくど、

上まで登りつめ、天に向かって「シャーッ！」と叫んだ。

ロアンも立ち上がり、西の空にそびえる大山に向かって叫んだ。

「雨降り神よ！」

すると、空には黒く大きな雲がわき、

雷の音とともにげげしい雨を降らせた。

たちまち横を流れる相模川の水があふれ、

にごった水は、黒い雲と見わけがつかないほどにせり上がり、

一気に大蛇をのみこみ、流れていったんじゃ。



「アル…」

庵にもどったロアンは毎日、アルの角の付け根をさすり、傷をなおそうとした。しかしそれはききめがなく、アルは少しずつ弱っていったんじや。

そしてロアンの方も、それまで人々の体をなおすために受け入れたけがや病が抜けず、苦しみが続いた。

(C) Office Shinji



ある日、村長の家に村人が集められた。

そこで、ロアンに背中のコブをとってもらった三太が言ったのじゃ。

「おいらは見たんだ、先生に消してもらったコブは、先生の体にうつったんだ。

みんながなおしてもらったけがも病気も、みんな先生の体にうつってるんだ」

すると大人のひとりが言った。

「そう言えばわしも、ロアン先生の背中がふくれているのを見たぞ」

ロアンの秘密を知った村人は考えた。

「これ以上先生にけがや病気をなおしてもらったら、先生が死んでしまう」

「もうこれ以上先生を苦しめないように、自分たちで病気にならないようにしようじゃないか」

そして、人々は病気にならないためにどうしたらよいか考えた。

「よくかんで物を食べなさいって、ロアン先生は言っとった」

「どんなものでも好き嫌いせず食えって、おいらには言ったぞ」

「んでもお、酒は飲みすぎたらだめじゃて…」

「働きすぎはいかん、働かないのもいかんと、わしは言われたぞ」

「わたしには手をよく洗いなさいって」

「わしには歯をよくみがくようにと言いなさいった、

なんでも、口の中はすべての病気が始まる場所だと」

「たしかに虫歯になって歯が抜けりや食えなくなる、食えなくなりや体も弱るなあ」

「それに早寝早起きも大事じゃぞ」

こうして村では、病気にならないための

決まりごとが作られた。

そして村人は、

それをよく守ったので、

病気になる者は少なくなった。

もちろん、わしも同じじゃ。

しかし

アルがブルルツと

口を鳴らし

村には再び危険が

せまったのじゃ…





アルの角が刺さった大蛇は相模川に流されたが、  
門沢橋村にある、門石という名の  
大きな亀のような形をした石にしがみ付き、  
傷がなおるのを待っていたのだ。

(C) Office Shinji Osada

やがて力をとりもどした大蛇は、  
ロアンに住む庵を襲ったのじゃ。

「シャーッ！」  
門沢橋村から本郷村へ、  
うなり声をあげながら恩馬郷を進む大蛇は、  
木々をなぎ倒し、家をつぶし、崖をくずして突き進んだ。  
上あごに刺さったアルの角はそのまま大蛇の角になり、  
おそろしい龍のように見えた。

大蛇は庵の前まで来ると叫んだ。  
「忌々しい人間とへら鹿め、ゆるさん！」  
しかし、アルは立ち上がることもできず、  
ロアンにももう戦う力はなかった。  
「わしが受けた苦しみを、  
十倍にして返してくれる！」  
大蛇は小さな庵をしっぽでからめ取ると、  
根こそぎ遠くに飛ばしてしまった。

飛ばされた庵のあとには、  
横たわったアルと、大きな弓を持ち、  
再び雨降り神に向かって  
祈りを捧げるロアンがいた。



すると今度も空が真っ暗になり、雷とともに

滝のような雨が降って来たのじゃ。

ゴロゴロゴロ！いなづまの放つ光と雨の中、

ロアンは弓に矢をつがえると、

ギリギリ：音をたてて引きしぼった。

背中のコブがズキズキと痛んだ。

「そんな矢でわしを射ようと言うのか、このたわけ！」

大蛇はとぐるからふり上げた首を大きく後ろに引き、

ロアンに襲いかかった。

ビュン！

矢が音をたてて飛び、

かたいウロコを破って大蛇の首につき刺さった。

「うううう：なんじゃこの矢は：ううううう」

大蛇はもがき苦しむ、

のたうちまわった。

刺さった矢には

アルの角をけずって作った、

するどい矢じりが

つけられていたのじゃ。

怒り狂った大蛇は

ロアンに襲いかかろうとするが

降りしきる雨で地面がぬかるみ

思うように身動きがとれない。

ロアンは続けて矢を放った。

するとその一本が、

大蛇の目にグサツと刺さったのじゃ。

「シャーッ！」

「アル、動かずに待っている」

ロアンは力をふりしぼって走り出し、

あばれる大蛇の背中に飛び付き、

首に向かって登って行った。

「覚悟しろ！」

そう叫ぶと、目に刺さった矢をつかみ、

体じゅうの力を込めてその目をくじり取ったのじゃ。

「ぐおおお、ぐおおお、ぐおおおおお…」

あばれもがいていた大蛇は死んだ。


滝のような雨は、大蛇がやってきた通り道を流れ、そこに川ができた。

ゴウゴウと降り続いた雨にのみこまれ、

やがて大蛇は流されていった。

(C) Office Shinji Osada





恩馬郷に静かな日々がもどってきた。  
それなのに：

傷ついたアルは、ロアンと村人に見守られ、静かに死んでいったのじゃった。  
村人たちは大蛇が作った川を「目久尻川」と名付けた。

ロアンが大蛇の目をくじり取ったからじゃ。

そして、その川は死んでいった大蛇のように暴れる川じゃった。

大雨が降るたびに流れを変え、水があふれ、

家や田畑をのみこむことが続いたのじゃ。

村人は「これは死んだ大蛇の呪いだ」と言った。

それを聞いたロアンはアルが残した角を、目久尻川の近くに立て、

川が静かになるようにと祈りをこめたのじゃ。

やがて、アルの角は成長し、大きな木になった。

へら鹿の角のようにのびのびと枝葉を広げる立派な木は、

人々の話題となった。

この木を見上げる人は「これはなんじゃ？」とつぶやいた。

遠くの町でうわさを聞いた人は「どんなもんじゃ？」とたずねたそうじゃ。

そしてその木は「なんじゃもんじゃの木」と名付けられたのじゃ。

なんじゃもんじゃの木が見守るように、

目久尻川は静かな流れとなった。

人々はこの川で魚をとり、洗濯をし、田んぼに水を引き、

生活のためにとても役立つ川になったのじゃ。

(C) Office Shinji Osada



それから：  
アルを失ったロアンは  
体じゅうに受け入れた村人の病を  
癒しながら日々を送った。  
そして、村人たちが自分たちの力で  
健康に過ごす様子を  
満足そうに見守った。

じゃが、  
今度も不思議なことがおきた。

村人がロアンに  
「先生のおかげで健康になったよ！」  
と言うと、

ロアンの体が少し楽になったのじゃ。  
三太が

「毎日野菜をうーんと食べてるよ！」  
と言うと、

ロアンはまた元気になったのじゃ。  
村人は気付いた。

良い言葉には不思議な力があると。

「ロアン先生、村を守ってくれてありがとう」

「先生のおかげで爺さまの病気がなおり、  
今じゃすっかり元気だ」

「元気な子供がうまれたよ」

「みんなよく働き、今年も米がたくさんとれたで、  
先生食っとくれ」

「子供たちはよく遊ぶけんども、  
よく勉強もする」

そんな『良い言葉』を聞いたたびに

ロアンは元気になっていった。

そしていつまでも、いつまでも、

村人と共に暮らしたのじゃった。

おわり

「ん？ わしか？」

わしの歳はいくつかって？

それはもう、とっくの昔に、

数えるのをやめてしまったのじゃあ（笑）」

(C) Office Shinji Osada



## あとがき

この物語は、海老名のまちに古くから語りつがれる昔話や歴史をもとに創作したものです。その昔話や歴史とは次のものです。

### ■ロアン

江戸時代、徳川将軍のお体を診る名医「半井驢庵」という人が現在の海老名市本郷のなんじやもんじやの木のある場所に住んでいました。

### ■アル

小田原市にある県立「生命の星・地球博物館」には海老名市河原口の地中から出土したへら鹿の化石が保存されています。氷河期の前後には海老名のあたりにへら鹿が生息していたと考えられています。

### ■恩馬郷

江戸時代には海老名の杉久保、本郷、上河内、中河内の四ヶ村を恩馬郷と言い、古くは安土桃山時代、豊臣秀吉による小田原攻めを記した資料にもその地名が残されています。現在は杉久保の豊受神社の宮司さんが恩馬さんという名前であり、神奈中バスのバス停に「恩馬ヶ原」などの地名が残されています。

### ■大蛇

かつて社家の三島社のツキの木というご神木に大蛇が住み着き、村人がこの大蛇に襲われる事件があったという民話が、海老名昔話に残されています。(ツキの木とはケヤキのこと)

### ■門石

昔、門沢橋の相模川のほとりに亀のような形をした大きな石があり、一説には国分寺七重の塔を作る際に礎石にするために運ばれてきたものではないかと言われています。昔、この石を移動させたところ村に災いが起こり、石は元の場所に戻されましたが、今はその姿は見えなくなっていました。

### ■目久尻川

昔、この川に多くの河童が住み着いており、村人にひどいいたずらをしたため村人が怒り、河童の目をくじり取ったことから、目久尻川という名前が付いたと言われています。

### ■阿夫利神社

江戸時代、大山詣でで人々から親しまれた阿夫利神社は、雨ごいの神様としても知られ、雨降り神社からその名が由来しているとも言われています。

以上のような昔話や歴史をモチーフにしてこの物語を創作致しました。歴史と文化の薫る海老名には様々な歴史や言い伝えがあることを、海老名の子供たちに感じてもらえたら幸いです。

平成三十年 秋 作者

## プロフィール

### 長田進治 (作)

海老名市に生まれ育つ  
郷土史にまつわる著作を趣味とする

### 著作

神尾驢庵(正義に生きた農民の記)  
胎動(海老名の自由民権運動)  
など

### 伊與田喜代美 (絵)

海老名市に生まれ育つ  
デザイン科卒  
臨床美術士(クリニカルアーティスト)  
水墨面の公募展において各賞受賞